

よろこびの知らせ

—礼拝メッセージより—



14

よろこびの知らせ
第14集

目 次

“Jesus, Remember Me”	1
ルカ 23:39-43	
ここにはおられません	10
ルカ 24:1-9	
目が開かれる	19
ルカ 24:25-35	
キリストの証人	28
ルカ 24:44-49	

ここに収められたメッセージは、2020年11月にテキサス州
プレーノ市にある永楽長老教会の日本語礼拝で語られたも
のです。聖書箇所は “Gospel Project” に沿って選ばれてお
り、聖句は新改訳聖書第二版より引用しています。

“Jesus, Remember Me”

ルカ 23:39-43

23:39 十字架にかけられていた犯罪人のひとはイエスに悪口を言い、「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え。」と言った。

23:40 ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。「おまえは神をも恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。」

23:41 われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」

23:42 そして言った。「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出してください。」

23:43 イエスは、彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」

イエスは十字架の上で7つの言葉を語りました。どれも短い言葉ですが、深い意味を持っています。最初が「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」（ルカ 23:34）、3番目が「女の方。そこに、あなたの息子がいます。…そこに、あなたの母がいます」（ヨハネ 19:26-27）、4番目が「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（マタイ 27:46）、5番目が「わたしは渇く」（ヨハネ 19:28）、6番目が「完了した」（ヨハネ 19:30）、7番目が「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」（ルカ 23:46）わざと2番目をスキップしましたが、それは、きょうの箇所にあります。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいま

す。」（ルカ 23:43）きょうは、この2番目の言葉から救いの道、イエスに近づく道について学びましょう。

一、罪を認める

「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」この言葉は、イエスといっしょに十字架にかけられた犯罪人のひとりに向かって語られた言葉です。イエスはその人に救いを約束しました。ルカの福音書には、取税人や罪人、遊女、悪霊に憑かれた人々など、神から遠く離れていると考えられていた人々に、イエスが手を差し伸べたことが書かれています。イエスが地上の生涯で最後に救いに導いたのも、十字架にかけられるほどの罪を犯した人でした。イエスはこの人が死を迎える日に、その処刑の場所で彼を救いに導きました。じつに、イエスの救いは、誰にでも、いつでも、どこにでも届くのです。

しかし、救いが「誰にでも、いつでも、どこにでも届く」と言っても、その救いを受け取るためには、人間の側でしなければならないことがあります。それは救いの「ABC」です。「A」は「罪を認める」（Admit your sins）です。

アダムが自分の罪をエバになすりつけ、エバが蛇のせいにしたように、自分の罪を認めないで誰かのせいにするのは、人類がはじまって以来のことです。誰かに責任を転嫁できないときは、生まれ育った環境や社会のせいにします。残念ながら、人の世に生きるかぎり、周りから何の害も傷も受けなくて済むことはないでしょう。人

の世ではそれは避けることはできません。しかし、だからと言って、自分の罪や過ちの責任が無くなるわけではありません。

十字架にかけられたふたりの犯罪人は「強盗」と呼ばれていますが（マタイ 27:38、マルコ 15:27）、おそらくはローマ帝国への反逆者だったと思われます。当時ローマからの独立を武力で勝ち取ろうとするグループがありました。反乱組織の資金調達のためには平気で強盗や殺人をしました。しかし、彼らは、自分たちはユダヤのために命をかけている「愛国者」である、自分たちの暴力はローマの暴力に立ち向かうための「正義の暴力」であると言って、自分たちを正当化していました。

こうした人たちは、イエスの教えや行動を生ぬるいと考えていました。「『敵を愛し、迫害する者のために祈れ』だって？ そんなことをしたらローマ兵が図に乗るだけだ。力には力で対抗するしかないのだ。力のない平凡な民衆や、女、子どもに信仰のことを教えても、理想の国はやって来ない」などと言っていました。もう一方の犯罪人は、イエスに向かって、「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え」と言いましたが、それはイエスをキリストだと信じたわけでも、自分が救われたいと願ったわけでもありません。それは「キリストだと言うのなら、自分と俺たちを救ってみろ」というののしりの言葉でした。

ところが、もうひとりの犯罪人は、イエスの苦しむ姿を間近で見るうちに、また、イエスが「父よ。彼らをお

赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」と祈るのを聞いて、イエスのうちに何の罪もないことを悟りました。そして、こう言って、もう一方をたしなめました。「おまえは神をも恐れぬのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」犯罪人の仲間にいるうちは決して自分の罪に気付かなかった彼でしたが、生まれてはじめて罪のない人に出会ったとき、彼は、自分の罪を知り、それを素直に認めました。

自分を他の人と比べているうちは決して自分の罪は分かりません。「あの人よりはましだ」と考えてしまうからです。しかし、何ひとつ罪のない、きよいお方の前に出るとき、いやでも自分の罪が見えてきます。多くの方は自分の罪と向き合いたくないので、神に近づこうとしないのです。人には神が必要なのに、神のもとに来ようとしなない、それは、きよい神の前に出るとき、かならず自分の罪を示されるからです。神は光であってすべてを照らすからです。しかし、神の光に照らされ、罪を示されることは、じつは、とても幸いなことなのです。病気は、それが見つけ出されなければ治療できません。同じように、イエスは、優れた医者が病気を見つけ、適切な治療を施してくれるように、罪を指摘するだけでなく、それを赦し、その結果を癒やしてくださるからです。

七世紀の人でニネヴェの主教であったイサクは「自

分の罪を認めることは世界を征服するよりも偉大なことである」と言いました。罪を認めることは決して恥ずかしいことではありません。自分の罪を認めることができる人は、自分に向き合うことができる正直で誠実な人、現実から逃げ出さない勇気ある人です。天への道はそのような人に示されます。救いの道、神に近づく道は“Admit your sins.” 自分の罪を認めることからはじまります。

二、イエスを信じる

救いの第二のステップ、「ABC」の「B」は「イエスを信じる」(Believe in Jesus)です。イエスを神の御子、救い主、また神の国の王として受け入れることです。犯罪人のひとは「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出してください」と言って、イエスが神の国の王であると信じました。イエスは、十字架につけられる前、大祭司に「あなたは、ほむべき方の子、キリストですか」と問われた時、「わたしは、それです。人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見るはずですよ」と答えています(マルコ 14:61-62)。イエス・キリストは「御国の位にお着きになる」王です。

この人は、十字架につけられて死んでいくイエスを救い主、神の国の王と信じました。十字架に釘付けになっている人が、どのようにして、王の王、主の主として栄光の座に着くのか、この時、誰も理解できませんでした。ところがこの人は、すでにイエスを栄光の王として

信じ、受け入れていたのです。

この人は、十字架の上で流す自分の血の一滴、一滴が、自分の犯した罪の報いを支払うものであることを知っていました。しかし、罪のないお方が流す血は、罪ある人間が流す血とはまったく違った意味を持っています。イエスは自分のためではなく罪人のために、その罪の赦しのために、その血を流されたのです。この人は、イエスの苦しみの意味を悟りました。そして、イエスが十字架の苦しみの後、死に勝利して復活し、天に凱旋することを信じました。

弟子たちでさえ信じることのできなかつた復活と昇天、そして再臨を、この犯罪人は信じたのです。なんとおどろくべき信仰でしょう。さんざん悪事を働いてきた人が救いの真理を知って信じることができたのは、ほんとうに不思議なことです。しかし、私たちも自分の罪を認め、何の弁解もすることなく神の前に出るなら、神は、神の真理をあきらかにし、救いの道を示してくださるのです。私たちが自分の罪を隠さなければ、神はご自分を現してくださり、自分を偽らなければ、神は真理を明らかにして下さいます。この人は真実な悔い改めによって神の前に出たので、救いの真理を知り、信じることができたのです。

三、救いを願う

救いの第三のステップ、「ABC」の「C」は「主の名を呼んで救いを願う」(Call upon Him for the salvation) ことです。神の救いは、わたしたちが求める以前から、神に

よって着々と進められてきたものですが、その救いはわたしたちが「救われたい」と願い、「救ってください」と求めることによって与えられるものなのです。救いは功績によって勝ち取るものではなく、神の恵みによって与えられるものですが、それは求めて与えられるもので、知らない間に、自分の意志と関係なく救われるのではありません。もしそうなら、わたしたちはロボットのようなものになってしまいます。イエスは、38年間病気だった人に「なおりたいのか」と呼びかけ、その人から「なおりたい」という願いを引き出そうとされました（ヨハネ 5:6）。イエスは盲人のバルテマイに「わたしに何をしてほしいのか」とたずね、バルテマイが「見えるようになることです」と、自分の必要をイエスに求めたとき、彼の目を開いてくださいました（マルコ 10:46-52）。

この人も「私を思い出してください」という言葉で、イエスに救いを求めました。「思い出してください」、「心に留めてください」、「覚えていてください」という言葉は、聖書では神に対する切実な願いを表すのに使われています。詩篇 106:4 には「主よ。あなたが御民を愛される時、私を心に留め、あなたの御救いのとき、私を顧みてください」という言葉があります。詩篇 112:6 にも「正しい者はとこしえに覚えられる」とあります。

イエスは救いを求めたこの人に、「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます」と言って即座に救いを与えました。イエス

の復活や昇天、再臨の時まで待つことなく、「きょう」なのです。「パラダイス」には「楽園」という意味があります。信じる者に与えられる永遠の喜びのことを指しているのですが、大事な言葉は「パラダイス」よりも、「わたしとともに」という言葉です。イエスがともにいてくださるところはどこであっても「パラダイス」です。ゴルゴタ（されこうべの丘）さえも、イエスがともにおられるならパラダイスに変わるのです。逆にたとえそこが地上の楽園のようなところでも、イエスがそこにおられなかったら、そこは決して幸いのある場所にはならないのです。現代、恵まれた生活をしていても暗い心で生きている人がなんと多くいることでしょうか。幸せそうに見えても、心に満足がないのです。愛の冷え切った家庭も多くあります。そこにイエスを迎えないからです。イエスのおられないところには、真の愛も希望も光も平安もありません。

イエスは、十字架を前にして弟子たちに言いました。「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」（ヨハネ 14:1-3）イエスが犯罪人のひとりに「あなたはきょう、わたしとともに…いる」と言っ

たのは、ヨハネ 14:1-3 にある「天国の約束」の要約です。イエスは、罪を認め、イエスを信じ、救いを求めたこの人に、同じ約束を与えたのです。

しかも、「まことに、あなたに告げます」と言って、その約束をより確かなものにしていきます。ここでの「まことに」には「アーメン」という言葉が使われています。「真実、その通り、確かなこと」という意味です。

「私を思い出してください」、「私を覚えていてください」とイエスを呼ぶ者を、イエスは決して忘れることはありません。「あなたとともにいる」との約束を決して破ることはありません。イエスが「アーメン」と言って差し出しておられる救いを、私たちも「アーメン」と言って受け取りましょう。救いの「ABC」“Admit”、“Believe”、“Call”（認め、信じ、呼び求める）というステップを踏んで、この約束を自分のものとしましょう。

（祈り）

父なる神さま、あなたは言われました。「女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。」あなたはあなたを信じる者をあなたの手のひらに刻み、決してお忘れになることはありません。イエスは、あなたの真実をもって、「アーメン。わたしはあなたとともにいる」と約束してくださいました。その約束に、私たちも「アーメン」と答えます。御子イエスのお名前によって、アーメン。

ここにはおられません

ルカ 24:1-9

24:1 週の初めの日の明け方早く、彼女たちは準備しておいた香料を持って墓に来た。

24:2 見ると、石が墓からわきに転がされていた。

24:3 そこで中に入ると、主イエスのからだは見当たらなかった。

24:4 そのため途方に暮れていると、見よ、まばゆいばかりの衣を着た人が二人、近くに来た。

24:5 彼女たちは恐ろしくなって、地面に顔を伏せた。すると、その人たちはこう言った。「あなたがたは、どうして生きている方を死人の中に捜すのですか。

24:6 ここにはおられません。よみがえられたのです。まだガリラヤにおられたころ、主がお話しになったことを思い出さない。

24:7 人の子は必ず罪人たちの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえると言われたでしょう。」

24:8 彼女たちはイエスのことばを思い出した。

24:9 そして墓から戻って、十一人とほかの人たち全員に、これらのことをすべて報告した。

全盲の詩人、ファニー・クロスビーは多くの賛美を書きましたが、その一つに「われに聞かしめよ主の物語」(Tell Me the Story of Jesus) というものがあります。その歌詞の3節目にこうあります。

十字架にかかりて われらの罪を
贖い給いし 主の物語
聞きたび読むたび 心溶けゆき
感激の涙に 目は曇るなり
われに聞かしめよ 主の物語
世にもたぐいなく 良き物語

この賛美にあるように、十字架の物語は涙なしには読

むことのできないものです。ある、日本の伝道者が、フィリピンで行われた伝道集会で、タガログ語への通訳者をつけて、英語でイエスの十字架の話をしました。ところが、通訳が途中で止まってしまったのです。その伝道者が通訳者のほうを振り向くと、通訳者は目に涙をいっぱいためていました。通訳を忘れるほど、イエスの十字架の愛に感動していたのです。その伝道者は、私に「彼の涙こそが最高の通訳でした」と話してくれました。私は、この話を聞いたとき、「聞くたび読むたび心溶けゆき、感激の涙に目は曇るなり」という歌詞を思い出しました。

きょうの箇所はイエスの復活のことを書いていますが、十字架の物語に戻り、イエスの十字架と復活を順を追って見ていきたいと思います。

一、イエスの十字架と葬り

イエスは、真夜中にゲッセマネで捕まえられ、宗教裁判にかけられ、祭司長たちによって有罪とされました。彼らは、夜が明けるとすぐに、イエスをローマ総督に引き渡しました。総督ピラトはイエスに何の罪も認めることができませんでしたが、「十字架につけろ。十字架につけろ」と叫ぶ人々の声に負けて、イエスを、他のふたりの強盗といっしょにローマ兵の手に引き渡しました（ルカ 23:23-24）。

ユダヤの国には人を鞭打つときには40回までという決まりがありましたが（申命記 25:3）、ローマにはそんなものはありません。ローマ兵は、力まかせに、40回どこ

ろか、50回も、100回も、鉛の鉾が埋め込まれた革の鞭で、イエスを鞭打ったことと思います。

また、兵士たちは、イエスに茨で作った冠をかぶせ、ローマ兵のマントを着せ、「ユダヤ人の王さま、ばんざい」などと言って辱めました。当時、地位のある人たちは紫色のマントを身に着けていました。ローマ兵のマントは赤でしたが、それが古びてくると、赤い色があせて紫色に見えます。兵士たちがイエスに着せたのは、ボロ布として捨てられていた古びて、色あせたマントだったのでしょう（ヨハネ 19:1-2）。

十字架にかけられる者は、自分の十字架を背負わされ、処刑場まで歩かせられました。イエスも重い十字架を担ぎましたが、さんざん痛めつけられていたので何度も道に倒れました。それで兵士は、群衆の中からシモンという男を連れてきて、イエスの代わりに十字架を担がせました（ルカ 23:26）。

処刑場は「ゴルゴタ」と呼ばれていました。「どくろ」という不気味な名前です（ルカ 23:33）。その場所が頭蓋骨のような形をしていたのでしょう。そこに着くと兵士たちはイエスの着物を剥ぎ取り、両手、両足に釘を打ち込みました。十字架にかけられると胸が圧迫されて息ができなくなります。それで腕を動かし、足を踏ん張ると、釘で貫かれたところから血が流れます。十字架につけられた人は、そうやって徐々に血を流し、死んでいくのです。それは、一気に殺すよりも、もっと残酷なものでした。

イエスはそんな苦しみの中から「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです」（ルカ 23:34）と祈りました。また、強盗のひとりの「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出してください」と願った信仰に答えて、「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます」と約束しました（ルカ 23:42-43）。そして、最後に「父よ。わが霊を御手にゆだねます」（ルカ 23:46）と言って息を引き取りました。兵士が脇腹から心臓を一突きしました。大量の血と水が流れ、イエスの死が確認されました（ヨハネ 19:34）。

ヨセフという人がいました。彼はユダヤ最高法院の議員でしたが、イエスに心を寄せていました。ふつう、十字架で死んだ者は葬られることなく、その遺体は捨てられるのですが、ヨセフは、イエスの遺体の下げ渡しをピラトに願い、それを新しい墓に葬りました。その時、同じ議員で、以前、イエスを訪ねたことのあるニコデモも、遺体に塗る香油を持ってやってきました（ヨハネ 19:39）。イエスの弟子たちは、イエスが捕まえられたとき、イエスを見捨てて逃げてしまい、誰ひとり、自分たちの師を葬ることをしなかったのです。ただ女の弟子たちだけが、イエスが葬られた墓を見届けました。こうして、イエスが十字架につけられ、墓に葬られた、あの金曜日が終わろうとしていました。

二、封印された墓

イエスは、十字架にかかられる前から、「人の子は人々の手に引き渡され、彼らはこれを殺す。しかし、殺されて、三日の後に、人の子はよみがえる」（マルコ 9:31）と話していましたが、弟子たちの誰ひとり、この言葉、とくに「三日の後に…よみがえる」という部分を覚えていた者はありませんでした。ところが、この言葉を覚えていた人たちがいました。それは、イエスを総督ピラトの手に渡して、十字架に追いやった祭司長たちでした。彼らは、ピラトがヨセフにイエスを葬る許可を与えたことを聞いて、金曜日の日没後、もう安息日が始まっていたにもかかわらず、慌ててピラトのもとにやってきました。彼らはイエスに「あなたは安息日を冒している」と非難していたのに、自分たちは平気で安息日の戒めを破っています。彼らは総督に言いました。「閣下。あの、人をだます男がまだ生きていたとき、『自分は三日の後によみがえる』と言っていたのを思い出しました。ですから、三日目まで墓の番をするように命じてください。そうでないと、弟子たちが来て、彼を盗み出して、『死人の中からよみがえった』と民衆に言うかもしれません。そうすると、この惑わしのほうが、前のぼあいより、もっとひどいことになります。」（マタイ 27:63-64）

ピラトは彼らの願いを聞き入れ、イエスが葬られた墓を封印しました。当時の墓は、岩をくり抜いて横穴を掘り、入り口を大きな石で塞いでいました。その入り口の

石を封印したのです。そして、誰も近づかないように、ローマの兵士たちが、その番をしました。このことは、金曜日の夜、安息日になってから行われたので、墓が封印されたことや、番兵がそこを守っていることを知る者は、ピラトや祭司長たち以外には誰もいませんでした。

夜が明け、また暮れました。忠実なローマ兵は金曜日の夜も、土曜日の夜も寝ずの番をして墓を守っていました。

三、イエスの復活

そして、日曜日、週の初めの日になりました。女の弟子たちは、夜が明けるのを待ちきれず、まだ暗いうちから香油を持って、墓に行きました。イエスの遺体に香油を塗って、自分たちの手で葬りをし、お別れをするためでした。彼女たちは、墓の石がすでに封印され、そこに番兵がいて、墓に入ることはもちろん、近づくことも許されないことを知りませんでした。

ところが、この時、世界の歴史を変える出来事が起こりました。イエスが復活し、もはや死ぬことのないからだとなって墓から出たのです。墓を塞いでいた石は転がり、墓の中にはイエスをくるんだ亜麻布だけが残されていました。そこに御使いが現れました。御使いを見た番兵たちは震え上がって、墓から逃げ出しました。そのあと、墓に着いた女の弟子たちは、入り口の石が転がっているのを見て驚きました。中に入ってみると、イエスの遺体が見当たりません。途方にくれていると、御使いが現われて、こう言いました。「あなたがたは、どうして

生きている方を死人の中に捜すのですか。ここにはおられません。よみがえられたのです。」（5-6節）

彼女たちは、イエスをまごころから慕っていました。高価な香油を買うことも、危険を冒して墓に行くこともいといませんでした。日曜日の朝には、散り散りになっていた十一人の弟子たちもひとところに集まっていたようですが、そのうち、誰ひとりとして、彼女たちと一緒に墓に行こうとはしなかったのです。そんな男の弟子たちにくらべ、彼女たちの信仰や行動力は、ほめられてよいものでした。けれども、彼女たちにひとつだけ足りないものがありました。それは、「イエスの言葉」です。

「イエスの言葉」に基づいて行動することです。彼女たちは「イエスの言葉」を忘れていたため、「生きている方を死人の中に捜す」失敗をしてしまったのです。

それで、御使いは、彼女たちに続けて言いました。「まだガリラヤにおられたころ、主がお話しになったことを思い出さない。人の子は必ず罪人たちの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえると言われたでしょう。」（6-7節）8節に「彼女たちはイエスのことばを思い出した」とあるように、彼女たちは、御使いに教えられて「イエスの言葉」を思い出しました。そして、男の弟子たちに墓での出来事を知らせに行くのですが、幾人かは、よみがえったイエスに出会っていません。イエスを慕っていた彼女たちは、十一人の男の弟子よりも先に、イエスの復活を撃者し、その証人となったのです。

イエスの反対者たちは、イエスを亡き者にし、墓に閉じ込めようとしました。しかし、封印も、番兵も、イエスの復活を阻止することはできませんでした。この世のどんな力も、この世のものではない力さえも、イエスを死に閉じ込めておくことはできません。イエスの反対者たちは、墓を封印し、番兵に墓を守らせて、誰もイエスの遺体を盗むことができないようにしましたが、それは、彼らの意図に反して、イエスの死と復活が事実であったことを、より確かにすることになったのです。

イエスは、「人の子は必ず罪人たちの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえる」と言われたご自分の言葉どおりに、よみがえりました。イエスは今、生きて、信じる者に永遠の命を与えてくださいます。ですから、信仰者は、「生きている方を死人の中に捜す」ようなこと、つまり、イエスがまるで亡くなられたままであるかのように考え、行動することをしてはならないのです。多くの人々は、キリストを信じるとは、自分を高め、社会を良くするためにキリストが遺していった教えを自分たちの力で守ろうと努力することだと考えています。もし、それだけなら、私たちの信仰は他の宗教と同じものになってしまいます。キリストを信じるとは、イエスが今、生きておられ、イエスが信じる者に命と力を与えてくださる、このイエスに生かされ、イエスとともに生きることです。だから、私たちは「クリスチャン」（キリストの者）と呼ばれるのです。

マルチン・ルターの妻カタリナは、ルターがふさぎ込

んでいたとき、喪服を着て彼の前に立ちました。ルターが驚いて、「どうしたんだ」と聞くと、カタリナは「あなたの主が亡くなられたようなので、私は喪服を着ているのです」と言いました。ルターは、その言葉にハッとして、もう一度、「主は生きておられる。私は、この主に生かされているのだ」という信仰に立ち返ったと伝えられています。私たちが信じるイエスは今、生きておられます。このことを信じることから希望と力が生まれます。イエスが今、生きておられることを確信することによって、平安と喜びを持つことができるのです。イエスに生かされ、イエスとともに生きる人生、これが信仰者の歩みです。復活の日、日曜日の礼拝で、この歩みに再出発しようではありませんか。

(祈り)

イエス・キリストを死者の中からよみがえらせてくださった父なる神さま。あなたは、イエスの十字架と復活によって私たちを罪から救い、新しいいのちに生きる者としてくださいました。イエスが私たちのために死んでくださったことと、イエスが今も生きていて、私たちとともにいてくださることを、イエスの言葉によって、日々、確信して、歩むことができますように。復活の主、イエス・キリストのお名前です。

目が開かれる

ルカ 24:25-35

24:25 するとイエスは言われた。「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。

24:26 キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光にはいるはずではなかったのですか。」

24:27 それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。

24:28 彼らは目的の村に近づいたが、イエスはまだ先へ行きそうなご様子であった。

24:29 それで、彼らが、「いっしょにお泊まりください。そろそろ夕刻になりますし、日もおおかた傾きましたから。」と言って無理に願ったので、イエスは彼らといっしょに泊まるために中にはいられた。

24:30 彼らとともに食卓に着かれると、イエスはパンを取って祝福し、裂いて彼らに渡された。

24:31 それで、彼らの目が開かれ、イエスだとわかった。するとイエスは、彼らには見えなくなった。

24:32 そこでふたりは話し合った。「道々お話しになっている間も、聖書を説明して下さった間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか。」

24:33 すぐさまふたりは立って、エルサレムに戻ってみると、十一使徒とその仲間が集まって、

24:34 「ほんとうに主はよみがえって、シモンにお姿を現わされた。」と言っていた。

24:35 彼らも、道であったいろいろなことや、パンを裂かれたときにイエスだとわかった次第を話した。

一、出来事とその知らせ

日曜日の午後、イエスのふたりの弟子がエルサレムか

らエマオに向かっていました。ふたりは過越祭が終わって自分たちの村に帰る途中でしたが、そこに見知らぬ人が近づいてきて尋ねました。「歩きながらふたりで話し合っているその話は、何のことですか。」（17節）その見知らぬ人も、エルサレムから来た人のようなので、ふたりのうちのひとり、クレオパは言いました。「エルサレムにいながら、近ごろそこで起こった事を、あなただけが知らなかったのですか。」（18節）「エルサレムで起こった事」というのは、イエスが十字架につけられたことを指しています。それは、つい三日前に起こったことで、エルサレム中で知らない人がないほどの大事件でした。クレオパは言いました。「〔それは〕ナザレ人イエスのことです。この方は、神とすべての民の前で、行ないにもことばにも力のある預言者でした。それなのに、私たちの祭司長や指導者たちは、この方を引き渡して、死刑に定め、十字架につけたのです。」（19-20節）それから、こうも言いました。「日曜日の朝早く、女の弟子たちがイエスの墓に行ってみると、イエスの遺体が無く、彼女たちは、天使が現われて『イエスはよみがえった』と告げたと言いました。」

クレオパは、ここで、十字架と復活の出来事を「ニュース」として話しています。確かにそれは誰をも驚かせる「ニュース」でした。先週私は「十字架の物語」という言葉を使って、イエスの生涯とその教えは「物語」（story）の形で伝えられていると言いました。ヒロシマやナガサキの被爆者の方や、日系人収容所に入

れられた方たちの話を、私は何度も聞いてきましたが、そうした人たちは「語り部」（story teller）となって実際の体験を話し、歴史を証言しています。同じように、イエスの弟子たちも「語り部」となって、イエスのしたこと、教えたことを証言しました。マタイ、マルコ、ルカは、そうした人々が世を去る前に「イエスの物語」を書物に残しました。それは「福音書」と呼ばれるようになりました。

「福音」という言葉には「グッド・ニュース」という意味があり、「福音書」は「ストーリー」ではあっても同時に「ニュース」、「ニュース・ストーリー」なのです。福音書は、神話や小説のように想像力を働かせて作り出されたものではなく、実際に起こった出来事の記録です。「イエスの物語」、「His Story」の“His”と“Story”をつなげると“History”となるように、「イエスの物語」は「歴史」です。しかも、それは何百年、何千年も前の「古代史」ではなく、一世紀の人々にとっては、同世代の歴史、「現代史」でした。

イエスの物語、とくに、イエスの十字架と復活が「ニュース」であるのは、私たちにとっても同じです。イエスの十字架と復活は、二千年前に起こった出来事ですが、この出来事は、現代の私たちひとりびとりに大きな意味を持っています。この出来事、このニュースの意味が分かる時、それは、私たちにきょうを生きる力を与え、明日に向かっていく希望を与えてくれるのです。

二、出来事の解説

さて、クレオパが話し終わると、今まで黙って聞いていたその見知らぬ人は、モーセの律法やイザヤ書、エレミヤ書などの預言を引用し、聖書全体から、キリストがどのようなお方か、なぜ苦しみを受けなければならないのか、そして、その苦しみした後、どのように栄光を受けるのかを次々と説明していきました。クレオパにとって、この人が引用した聖書の言葉は、みな、子どものころから会堂で聞いていて、よく知っていたものだったでしょう。しかし、そうした箇所が、今までとは違って新しい意味をもって心に響いてきたのです。クレオパともうひとりの弟子は、エルサレムにいて、イエスの十字架をその目で見、イエスの復活の第一報をその耳でじかに聞いていたのに、その出来事の意味を理解していませんでした。ふたりは、聖書によってその出来事が解き明かされ、はじめて、その意味を知ることができ、その出来事が自分のものとなったのです。

このこともまた、今日の私たちに当てはまります。私たちの身の回りにはさまざまな出来事が起こります。今年にはコロナ・ウィルスが世界中に広がり、私たちの生活は一変しました。ニュースといえば、「コロナ」に関連したことが真っ先に報道されます。私たちは、感染者数が増えたり減ったりする数字を見ては一喜一憂し、ワクチンに効果が認められたという報道を聞いて希望を持ったりします。しかし、このパンデミックの中で自分がどのように生きていけばよいのかは、ニュース・キャス

ターもコメンテーターも答えてはくれません。その答は、ひとりひとりが聖書から得る他はありません。

しかし、聖書から答を得るといっても、目をつむって聖書のどこかのページを開き、目をつむったまま、そのページのどこかを指さし、指さした言葉が答になるというのではありません。それは、聖書のメッセージをフォーチュン・クッキーのメッセージと同じように扱うことになってしまいます。聖書のそれぞれは、それぞれに主題に基づいて書かれています。どこに何が書かれているのかを知って聖書を読むのは大切なことです。また、書かれてある言葉を文脈にそって理解すること、一つの箇所の一つの言葉だけで判断するのではなく、関連した箇所と比較して読むことも大切なことです。そうでないと、ひとりよがりの解釈をして、とんでもない間違いをしてしまいます。そうした間違いを防ぐためには、聖書の正しい解き明かしが必要なのです。

ネヘミヤ 8:8 に「彼らが神の律法の書をはつきりと読んで説明したので、民は読まれたことを理解した」とあります。続くネヘミヤ 8:12 には「こうして、民はみな…大いに喜んだ。これは、彼らが教えられたことを理解したからである」とあって、神の言葉の解き明かしとその理解が、人々に大きな喜びをもたらしたことが書かれています。

使徒 8:31 に「導く人がなければ、どうしてわかりましょう」という言葉があります。聖書を読んでいたエチオピアの役人が、伝道者ピリポから「あなたは、読んで

いることが、わかりますか」と尋ねられたとき、その役人がピリポに答えた言葉です。ピリポは、エチオピアの役人に、彼が読んでいた箇所を解き明かし、イエス・キリストを伝えました。エチオピアの役人は、それによってイエス・キリストを信じ、バプテスマを受けました。

こうしたことは、聖書の解き明かしがどんなに大切であるかを教えています。教会の礼拝でのメッセージ、スモール・グループでの学び、また、日々の個人のデボーションを通して、聖書が解き明かされることによって、正しい答を聖書から得ることができるようになるのです。

三、出来事の実解

エマオの村は、エルサレムから8マイル、歩いて2～3時間くらいのところがありました。それで、三人は話しているうちに、もうエマオに着いてしまいました。見知らぬ人はまだ先に進もうとしていましたが、もう日も傾きかけていましたし、もっと話を聞きたかったので、ふたりは、この人を引き止め、家に招き入れ、食事を共にしました。この人はテーブルをはさんでふたりの正面に座りました。ふたりが食事の祝福をこの人に頼むと、この人はパンを裂いて祝福し、ふたりに渡しました。その時です。ふたりはその人を見て驚きました。それはなんと、イエスだったのです。ふたりは顔を見合わせました。そして、もう一度テーブルの前に座っているイエスを見ようとしたのですが、もう、そこにはイエスの姿はありませんでした。いままで、ふたりと一っしょに歩い

て、道々、聖書を解き明かしてくれた人は、イエスご自身だったのです。復活されたイエスが、ふたりに現れ、ご自分の苦難と栄光とを、聖書から解き明かして下さっていたのです。

その人がイエスだと分からなかったのは、「ふたりの目がさえぎられて」（16節）いたからでしたが、何がふたりの目をさえぎっていたのでしょうか。それはイエスが「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち」（25節）と言ったように、自分の先入観でイエスを見、聖書に聞こうとしなかったからです。ふたりは多くのユダヤの人々と同じように、キリストが来れば、ユダヤはローマ帝国から解放され、独立国家になれると信じていました。キリストの救いを、ユダヤ民族や政治的なことだけに限定していたのです。そうであれば、イエスはローマ総督によって十字架につけられたのですから、ローマの権力に負けてしまったことになります。ユダヤ独立の希望はイエスの十字架の死によって絶たれてしまったことになります。イエスが、最初に、ふたりに声をかけた時、ふたりが「暗い顔つき」（17節）になったのは、そのためでした。ふたりは、イエスの死によって、今までの期待のすべてがくじかれ、失望の中にあっただのです。

しかし、聖書は、キリストの救いをユダヤをローマから解放して独立国家にすることだとは言っていません。実際、ユダヤはローマから独立することなく、エルサレムは神殿もろとも滅ぼされてしまいました。キリストが

世に来られたのは、罪と死の奴隷となっているすべての人を、そこから救い出すためでした。そして、そのために、イエスは、すべての人の、あらゆる罪を背負って身代わりとなって死に、すべての人に救いを与えるために復活されたのです。ふたりがエルサレムで見たイエスの十字架は、失望のしるしではなく、救いのしるしでした。女の弟子たちが伝えた復活の知らせは、彼女たちが見た幻想ではなく、救いの成就を告げる、確かな事実でした。ふたりは、そのことを悟ったのです。

ふたりの心は、聖書が解き明かされている間、燃えていました（32節）。そして、ふたりが聖書を理解した時、その「目が開かれ」（31節）、イエスが分かったのです。36節以降には、イエスが他の弟子たちにも現われて、彼らを教えたことが書かれています。その45節に「そこで、イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、こう言われた」とあります。ふたりの「目が開かれ」たことと、他の弟子たちの「心が開かれ」たことは、同じ体験です。福音を聞き、それが解き明かされた時、弟子たちは「目が開かれ」、「心が開かれ」、福音の真理を悟り、イエスを確信しました。

私たちもまた、御言葉の解き明かしによって目が開かれます。イエスがよみがえって、今、生きておられることの確信へと導かれていくのです。英国の伝道者ジョン・ウェスレーはその日記にこう書いています。「その日の夕方、私はあまり気が進まないままにアルダスゲート通りの集会に行った。そこである人が、ルターの

『ローマ人への手紙』の序文を読んでいた。8時45分ごろ、キリストへの信仰を通して、神が心に働いて起きる変化について語られてた時、私は心が不思議と温まるのを感じた。私は、救いのために、キリストに、キリストだけに信頼した。キリストは罪を、私の罪さえ、取り去られ、罪と死の法則から私を救ってくださったという確信を与えられた。」1738年5月2日の日記です。皆さんが、クレオパやウェスレーのように、心が燃えた日、心が温った時は、いつだったのでしょうか。私たちはすでに福音を聞いています。その解き明かしも聞いています。イエスに心を開き、福音を受け入れましょう。そのとき、私たちも信仰の目で、生きておられるイエスを見、救いの確信と生きる力とを与えられるのです。

(祈り)

父なる神さま、あなたは、イエス・キリストのみわざと私たちの救いを、聖書にはっきりと記してくださいました。そればかりでなく、御言葉の解き明かしによって、私たちがイエス・キリストと出会い、救いの真理を悟ることができるようにしてくださいました。どうぞ、私たちと、このメッセージを聞くすべての人の信仰の目を開き、救い主イエスが、日々に私たちとともにおられ、私たちの人生をともに歩いてくださることを確信させてください。イエス・キリストのお名前です。

キリストの証人 ルカ 24:44-49

24:44 さて、そこでイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」

24:45 そこで、イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、
24:46 こう言われた。「次のように書いてあります。キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、

24:47 その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。

24:48 あなたがたは、これらのことの証人です。

24:49 さあ、わたしは、わたしの父の約束してくださったものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」

一、キリストの証人

きょうは「キリストの証人」というタイトルでお話しますが、「キリストの証人」とは誰のことでしょうか。それは、まずは、イエスの直接の弟子たちのことです。イエスが弟子たちに「あなたがたは、これらのことの証人です」（48節）と言われた通りです。

ユダのかわりにもうひとりの使徒を補充するとき、ペテロは、「すなわち、ヨハネのバプテスマから始まって、私たちを離れて天に上げられた日までの間、いつも私たちと行動をともにした者の中から、だれかひとりが、私たちとともにイエスの復活の証人とならなければ

なりません」（使徒 1:22）と言いました。十二使徒のひとりになるにはそのような条件が必要でしょうが、聖書では、地上におられたときのイエスに出会っていない人たちも、「証人」と呼ばれています。たとえば、パウロですが、彼は地上におられたイエスに会っていません。パウロはイエスと同時代の人でしたから、イエスに出会っていても不思議ではないのですが、彼はパリサイ派のひとりで、イエスに反対する立場にいましたので、イエスに会いたいとも思っていませんでした。しかし、パウロは、復活されたイエスに出会い、「起き上がって、自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現われたのは、あなたが見たこと、また、これから後わたしがあなたに現われて示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人に任命するためである」（使徒 26:16）という言葉を書きました。イエスがパウロを「証人」と呼んだように、後になってイエス・キリストを信じた人もまた「キリストの証人」と呼ばれたのです。

パウロは自分の弟子テモテに「ですから、あなたは、私たちの主をあかしすることや、私が主の囚人であることを恥じてはいけません」（テモテ第二 1:8）と命じました。テモテは、小アジア、今日のトルコのルステラという町にいた青年で、パウロに導かれてキリストを信じました。テモテはパウロを通してしか、イエスの言葉を聞いていません。しかし、彼もまた、「主をあかしする」務めを与えられた「キリストの証人」でした。パウロはテモテに「多くの証人の前で私から聞いたことを、他の

人にも教える力のある忠実な人たちにゆだねなさい」
（同 2:2）とも言っています。真理はキリストからパウロへ、パウロからテモテへ、そしてテモテから次の人へ、次の人からその次の人へと伝えられ、「キリストの証人」としての務めは、今日まで受け継がれているのです。

ペテロ第一 2:9 にこう書かれています。「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。」イエス・キリストを信じて救われた者は、すべて、キリストの救いのみわざを宣べ伝える「キリストの証人」です。「あなたがたは、これらのことの証人です」（48 節）との言葉は、今日の信仰者、私たちにも語りかけられているのです。

二、証人の務め

では、「キリストの証人」として、私たちは何をするのでしょうか。何をしなければならないのでしょうか。まずは、イエスが教えてくださったことを忠実に他の人に伝えることです。イエスは聖書を解き明かして、「キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる」（46-47 節）と教えました。そして、ペテロはペンテコステの日にかこう説教しました。「神はこのイエスを

よみがえらせました。私たちはみな、そのことの証人です。…ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはつきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。…悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。」（使徒 2:32-38）イエスの教えとペテロの説教を比べてみてください。全く同じです。ペテロは、イエスが教えた通りに、十字架と復活、悔い改めと罪の赦しを忠実に伝えていきます。

証人は、自分が見たこと、聞いたことを忠実に、正確に伝えなければなりません。勝手に付け加えたり、削り取ったり、自分の意見を入れて変更することは許されません。パウロは、コリント人への手紙で「ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。それはユダヤ人を獲得するためです。…律法を持たない人々に対しては…律法を持たない者のようになりました。それは律法を持たない人々を獲得するためです」（コリント第一 9:20-21）と言いましたが、それは福音を伝えるときの配慮や方法について言っているのであって、相手によって福音を変えたと言っているわけではありません。パウロは、同じ手紙のはじめのところで、「しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです」（コリント第一 1:24）と

言って、福音そのものは、ユダヤ人に対してでも、ギリシャ人に対してでも変えられてはならないと言っています。ユダヤ人の福音やギリシャ人の福音、あるいは古代人の福音や現代人の福音などと、いくつもの福音があるわけではありません。どこの誰であっても、どの時代の人であっても、イエスの十字架と復活により、悔い改めと信仰によって救われるという、ただひとつの福音があるだけです。

このように「キリストの証人」には正確に福音を伝える務めがあるのですが、正確でありさえすればいいというだけではありません。それ以上のものが求められています。それは伝えた福音の正しさを自分の生活によって実証するということです。薬や健康食品などの宣伝に“Testimony”とあって、「これを使ったら、こんなによくなりました」という体験談が使われますが、その薬やサプリメントを勧める人が、病気だったり、不健康だったりしたら、何の説得力もありません。同じように、キリストの救いを伝える人が、救いの確信がなく、罪の赦しから来る平安や喜びを持たず、いいかげんな生活をしていたら、誰が福音を信じるでしょうか。キリストの救いを身をもって証明する、それが「キリストの証人」の務めです。

そう言われると、私たちはみな「罪赦された罪人」であり、不完全ですから、「私などがキリストのことを話したらかえって人々の躓きになってしまう」と心配になります。けれども、すべてに完全な人が誰もいないよう

に、キリストをあかしするのに、どんな素質もない人もありません。いろいろな欠点や弱さがあつたとしても、それを素直に認め成長を目指しているなら、人々は、その素直さ、真剣さを見て、福音に耳を傾けてくれるでしょう。失敗の多い人であっても、それにめげないで努力しているなら、人は、それを見てキリストに心を開くでしょう。言葉でうまく話すことができなくても、他者に対する思いやりを持ち、実際的な手助けを惜しまないなら、人々はその人のうちにキリストを見出すことでしょう。イエスは、私たちに与えられている素質を生かし、それをあかしのために用いてくださるのです。

三、証人の力

最後に「キリストの証人」となる力がどこから来るのかを学びましょう。それは、聖霊から来ます。イエスは弟子たちに「さあ、わたしは、わたしの父の約束してくださったものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい」（49節）と言われました。「父の約束してくださったもの」とは聖霊のことです。聖霊が、弟子たちに、また、私たちに、力を着せて、「キリストの証人」にしてくださるのです。

「力を着せられる」とはどういうことでしょうか。聖書に「主は、王であられ、…力を身に帯びておられます」（詩篇 93:1）とあるように、神ご自身が全能の力を身にまとっておられます。「力を着せられる」とは、私たちが、神のまとっておられる力を着せていただくとい

うことです。放蕩息子は父親のもとに帰ってきたとき晴れ着を着せでもらいました。その晴れ着は、私たちが悔い改めて神のもとに帰るときに着せていただける義の衣、救いの衣のことを指しています。神は、義の衣、救いの衣を着せて、私たちをご自分の子どもにしてくださいだけでなく、神ご自身の力を着せ、私たちを「キリストの証人」にしてくださいなのです。警察官の制服やバッジが、犯罪を取り締まる権威を与えるのと同じように、「キリストの証人」には人間のどんな力にもまさる神の力が着せられるのです。弟子たちはユダヤの指導者から見れば小さく弱い人々でしたが、聖霊を受け、神の力を着たとき、どんな権威も力も、圧迫も迫害も恐れず、それらに勝利していきました。

今日のアメリカでは信仰の自由がありますが、それでも、人々にキリストをあかししようとするると困難に直面します。パンデミックの中で、自分の生き方や人生を考え直さなければならないのに、人々は信仰を求めようとはしません。神なしでも結構やっていけると考えています。日本の人々は宗教にたいする警戒心が強く、多くの人が教会やクリスチャンに距離を置いています。生活があまりにも忙しい、物質主義に染まっている等、福音の妨げと思えるものはいくらでもあります。そうした妨げを人間の知恵と力で取り除く工夫をしたからといって、それで福音が広まり、人々がキリストを信じるようになるわけではありません。人々が福音に耳を傾け、それを信じ、受け入れるためには、なによりも、上からの力、

聖霊の力が必要なのです。聖霊の力なしに人々の目は開かれず、真理を悟ることはありません。また、聖霊の力なしに、他の人々と真理を分かち合う知恵が私たちに与えられることもありません。

イエスは弟子たちに「力を授けられるまでは、都にとどまって」いるようにと命じました（49節）。イエスは弟子たちに「行け」と命じましたが、弟子たちが聖霊を受けることなしに出て行くことを望まれませんでした。出て行く前に、出て行くための身支度をすることを弟子たちに求められたのです。弟子たちはイエスが天に帰られてから、なお10日間待ちました。ぼんやりと待ったのではありません。心をひとつにし、祈りに専念して聖霊を待ちました。そうして、弟子たちは聖霊の力を着せられ、力を授けられ、「キリストの証人」になって全世界に出て行ったのです。

私達も初代の弟子たちと同じように、出て行く前の身支度が必要です。私達はキリストの救いを体験し、確信しているでしょうか。福音を知り、学び、理解しているでしょうか。聖霊の力を着せられているでしょうか。礼拝は、あかしの場への派遣式です。この礼拝から、それぞれのところに遣わされ、出て行く前に、聖霊の力を着せていただきましょう。聖霊が福音を伝える者にも、それを聞く者にもともに働いて力を現してくださるように祈りましょう。

（祈り）

父なる神さま、けさ、私達は、イエス・キリストを

信じる者がみな「キリストの証人」であることを学びました。それは、頭では分かっているのですが、私たちには、人々にキリストをあかししようとするとき、なお不安があり、ためらいがあり、恐れがあります。そのような私たちに聖霊によって、あなたの力を着せてください。それによって、初代の弟子たちのように大胆にあなたをあかしすることができるようにしてください。イエス・キリストのお名前です。

日本古来の宗教は「神道」（しんとう）ですが、これは他の宗教のように教祖や教義、経典のあるものではありません。古代の日本は農耕が中心でした。田畑を耕し糧を得るには、ほどよい日照と雨が必要がありますが、気象、気候は人間の力をこえたものです。創造主の知識がなかった人々は気象、気候を司る神々を祀り、宥めるようになりました。やがて各地に「氏神」（うじがみ）を祀る神社ができ、そこでの祈願や感謝の祭りは、地域の人々を結びつけるものとなり、それは今日まで残っています。本来は「氏子入り」（うじこいり）という儀式を経て「氏子」となるのですが、多くの場合、「宮参り」や、その地域に住むことによって自動的に「氏子」とされ、自治会の予算に「神社費」があり、神社への寄付が自治会で当然のように集められています。日本では、神社や祭りは宗教ではなく、習俗や伝統と考えられているからです。

江戸時代、幕府は、キリシタンを排除するため「寺請制度」を設け、寺院に戸籍を扱わせましたので、誰もが特定の寺院の「檀家」（だんか）にならなければなりません。それで、ほとんどの人が、氏子であり、同時に檀家であるということになりました。神社は「地域」の宗教、寺院は「家」の宗教となり、日本人は一般に二つの宗教を同時に持つことを不思議とは思わなくなりました。日本の宗教の信徒数の合計が日本の総人口よりも多いのはそのためです。



Penguin Club

www.penguinclub.net